

令和元年6月22日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03045

研究課題名(和文)近世京都の医療環境と医学研究の展開

研究課題名(英文)The medical environment and the development of medical research in early modern Kyoto

研究代表者

横田 冬彦 (Yokota, Fuyuhiko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：70166883

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本課題研究では、近世京都の禁裏御典医でもあった百々家の所蔵史料および明治30年代に京都大学付属図書館に寄贈された蔵書資料の調査、および目録作成を行った。また、研究代表者は、医学史研究をふくむ近世書物文化史研究を集成した単著を刊行し、分担研究者は同じ京都の医者小石家の書簡集を刊行した。それらを通じて、特に百々家の具体例を通じて、日本近世社会における医療環境と、そこでの民間医による医療や臨床の実態、彼らの医学研究の在り方について、具体的に明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、近世京都の医家の蔵書資料や医療関係史料の整理と分析をおこなった。医学史研究は、たんに医学理論や学問・技術としての医学の発展としてだけではなく、感染症流行をはじめとした現実の医療環境における、医療行為・臨床経験の積み重ねの中で、理論や方法が革新され展開していく過程を跡付けねばならない。これまでの医学史研究が基本的に医学書の分析を対象としていたのに対し、そうした医療環境・医療経験を組み入れた実態を、医家そのものの史料によって分析、解明した社会史的研究であるところに、本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we surveyed and made an inventory of the collection materials of the Dodo family who was the private doctor also the official doctor of the emperor's family in the early modern Kyoto. And we also made a complete list of the collection of Dodo's books and materials donated to the Kyoto University Library in the 1900s. In addition, the research leader published the book summarizing research on cultural history of the early modern period, including research on medical history, and the shared researcher published the collection of letters of the other doctor in Kyoto. Through them, in particular, through the specific example of the Dodo family, it was possible to specifically clarify the medical environment of the urban society in early modern Japan, the actual state of medical care and clinical practice by private doctors there, and the way of their medical research.

研究分野：日本近世社会史

キーワード：近世京都 医学書 医療環境 百々家

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近世医学史研究においては、漢方医学の本流である後世方からそれを批判した古医方へ展開し、それが蘭学につながる親試実験主義を導入することで、西洋医学・近代医学へとつながっていくと考えるのが「通説」であり、蘭学・洋学史研究としても大きな成果を有している。しかしここには、方法論的にみて、いくつかの問題点があると考えられる。

第一に、こうした古医方から蘭学へという流れは、西洋近代医学こそが科学的な流れであり、そこに到るものだけが「近代化」に値するという一種の結果論ともいえる。そこでは、後世方派である江戸幕府奥医師や京都の禁裏御典医は、『黄帝内経』等の古典文献の考証学の域をでない守旧的な漢方医学にすぎないとみなされてきた。今日の医学史研究は、古医方の学的内容に疑問をもち、こうした通説を再検討しつつあるが(山田慶児・石田秀美らの業績、たとえば『歴史の中の病と医学』1997年)それはあくまでも、医学書研究、医学理論上の分析として行われており、通説に代わる流れや担い手を具体的に見いだしているとはいえない。

第二に、富士川游以来の医学史研究は、医学書のテキスト分析を中心としたため、現実の社会や人びとの医療環境がどのようなものであるのか、医者や患者の医療や彼らの医学研究がどのように行われているのかといった社会史的な分析はほとんどなかったといえる。

2. 研究の目的

本研究代表者は、これまで近世の出版文化の在村社会への広がりやあり方を研究し、その中で在村医の社会的実態、医学書などの普及・活用実態の究明、資料発掘を行ってきた。

本研究は、後世方派の典型といえる禁裏御殿医百々家が、どのような医療を行っていたかをその診療記録から明らかにするとともに、人口の密集した大都市の医療環境の中で、感染症を始めとした病気とどのように格闘し、その医療状況を打開しようとしていたのか、その格闘のなかから、後世方派なりの文献医学研究はどのような展開を示していたのかを明らかにすることで、通説的な西欧化・近代化とは別の医学発展のコースがあったことを明らかにする。

そうした事実を発掘していくことは、たんに日本医学史研究としてだけでなく、内発的な「近代化」を生み出すような、近世的な<知>のあり方の構造的な把握においても重要な問題提起になると考える。禁裏御殿医であった百々家の史料・蔵書を調査・研究する。そのことを通じて、

近世後期の都市社会京都における病気・医療(医療環境)の状況、それに対する百々家の医療努力・医学書研究・実験的医療の試みなどをあきらかにし、古方派から蘭学を媒介とする医学近代化という通説は異なる、漢方医学の本流である後世方派からの医学近代化への発展の道筋を見出す。そのことによって、内発的な「近代化」を孕んだ近世文化・知の構造を再検討する。

3. 研究の方法

本研究の素材は、江戸時代中期から禁裏御殿医となった百々家資料である。それは、(A)明治30年代に京都大学附属図書館に寄贈された蔵書および著作5700点余と、(B)御子孫宅に残され、本研究代表者がその準備調査をおこなってきた資料約1000点がある。後者には、百々家の家譜、近世・近代の診療記録、近世後期の医師・文人達との交流を示す書翰類、百々漢陰・鳩窓の読書ノート・講義録、門人帳、明治以降百々復太郎の西洋医学研究ノート、漢詩等の墨跡などが残されている。

これまで、(B)のごく一部は、『京都の医学史』の編纂過程で明らかにされていたが、そのほとんどはこれまで知られていなかったもので、また、(A)についても、図書館収蔵の際に、ごく一部が貴重書となったほかは、すべてバラバラに配架され、その全貌は全く不明になっていた。

このため、本研究においては、以下の方針で調査をすすめた。

百々家所蔵史料(B)の整理・目録化および写真撮影をおこなう。

そのうち、百々家の書翰資料については、その翻刻作業をは写真版をもとに、研究代表者・分担者および若干の協力者とともに共同研究を定期的におこなう。

京都大学附属図書館所蔵の百々家旧蔵書等については、附属図書館の「受入原簿」をもとに、1点ずつを探索して、貴重書・一般和書とともに、その書誌的事項についての詳細な目録化を進める。

その結果、

百々家所蔵資料(B)についての整理・写真撮影は、2016年度に完了。全点の仮目録も2016年度におおよそ作成し、その後も補充、点検を進めている。

(B)のうち、百々家と諸家との書簡史料については、分担研究者をふくめ、ほぼ毎月の定例研究会を組織して、その解読を進めた(現在も継続中)。そのほかの医学関係資料についても、研究を進めた。

京都大学附属図書館所蔵の蔵書史料(A)については、附属図書館関係者の協力も得て、明治30年代の「受入原簿」による調査を進め、ほぼ全点についての目録作成を完了した。

当初は、地方門人の状況や刊行著作の普及状況なども調査する予定であったが、準備調査等しかできなかった。

4. 研究成果

(1)本研究の準備段階であるが、2015年に第29回日本医学会総会が京都で行われたのにあわせて、同年2-4月に京都大学博物館で「京の医学史展」が開催され、あわせて連続講演会「医学史サロン」が開かれた、本研究代表者は、この展示に百々家の資料展示・解説をおこなうとともに、3月29日に百々家について講演を行った。展示では、百々漢陰・鳩窓の診療記録を展示するとともに、講演では、百々家の系譜や京都の文人界における位置および、その医学研究の意義について講演した。

(2)研究代表者は、単著『日本近世書物文化史の研究』をまとめた(2019年5月刊行)が、このうちに「医学的な知をめぐってー医療政策と地域社会ー」という章を設けて、近世における医学的な医療や医学書研究のあり方について論じた。これは主として都市社会をあつかう百々家研究とは対になる村落社会の実態を扱っているとともに、後世方派の医療実態としては、百々家史料が示す近世後期の前提をなす位置を占める。なお、本書は、第40回日本出版学会賞を受賞した(2019年5月)。

また、研究分担者は、京都の医家小石家の史料調査を他の科研プロジェクトにおいて刊行した(2017年12月)が、小石家は百々家と同じ京都において、蘭学を積極的に取り入れた医家で、やはり後世派の百々家と対になる事例研究の位置を占める。そして、両家の書簡解読が進むにつれてわかってきたのは、両家の往復書簡や親密な交流も確認でき、京都の医療関係者をふくむ文人・知識人社会は、医学の諸派なども抱合してなりたっていることである。

(3)百々家は明治30年代に京都大学附属図書館にその蔵書約5000冊(A)を寄贈するが、その経緯が、当時の事務記録などから判明した。すなわち、当時京都帝国大学は、東京大学と違って、昌平坂学問所や蕃所調所、医学館などの前身組織を全くもたなかったため、ゼロから蔵書収集を行わねばならず、一般市民の寄贈を呼び掛けたという事情があったのである。

2017年9月29-30日に、本研究代表者が企画して、京都大学において、書物・出版と社会変容研究会の京都大会を開催したが、その際、この経過を「京都帝国大学附属図書館蔵書の成立」と題して報告した。また、百々家寄贈医学図書をはじめ「京都大学附属図書館所蔵医学史料」の展示と解説をおこなった。

また、メインのシンポジウムでは「近世医学と医学書をめぐる諸問題」をテーマに、研究分担者が「漢蘭折衷医・小石家の医書とネットワーク」を報告した(他に報告2本)。

(4)百々家に残された史料(B)のうち、百々漢陰・鳩窓による天保期の「診療記録」からは、患者の実数519人、のべ772件の症例が確認でき、傷寒・温疫などの感染症の流行のほかに、肩癰や疝気といった日常的な病気のありよう、医者との家族・使用人も含めての掛り付け関係や、公家・武士・町人など身分を越えた診察関係、ちょっとした風や腹痛・頭痛などでも診療をもとめるといった、人々の医療受容の実態をも明らかにすることができた。

そうした医療環境・臨床実態をふまえて、(A)に残されていた講義ノートや読書ノートなどを合わせて読み込むことで、百々家の臨床研究・医学書研究の実態、門人教育の在り方などが詳細にわかってきた。これらについては、その成果を別に発表する予定である。

なお、(B)のうち19世紀前半を中心とした百々漢陰・鳩窓に宛てられた重要書簡史料100余通については、分担研究者とともに、なお解読作業を進めている途中であり、百々家と江戸の幕府典医多紀家や京都の諸医家、漢学関係者などとの興味深い関係が解明されつつある。

(5)(A)に残された明治期の百々復太郎関係史料は、整理をおえることができたが、断片的なもの集合で、まとまった研究をするには、なお考慮が必要であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

有坂道子、江戸時代における京坂の医学、『クロナス』、38号、査読無、2016、43-46

有坂道子、小石家と漢蘭折衷医学、後掲『究理堂所蔵 京都小石家来簡集』所収、査読無、2017、286-291

有坂道子、木村蒹葭堂のネットワークにみる知の交流、CEL、査読無、117号、2017、34-41

有坂道子、幕末京都の文人交流、『京都 人とモノの発見』、査読無、6号、2018、48-62

横田冬彦、江戸の編集者、『図書』、836号、査読無、2018、17-21

横田冬彦、「史料」問題と「地域」史、『日本史研究』678号、査読無、2019、61-68

有坂道子、野中烏犀円文庫史料に見える大阪の薬種商と薬剤について、佐賀大学地域学歴史文化研究センター『佐賀藩薬種商・野中家資料の総合研究』所収、査読無、2019、49-58

〔学会発表〕(計5件)

横田冬彦、日本近世における読書文化の成立、パリ第7大学招待講演、2016

横田冬彦、歴史と国家 日本近世の百科事典『節用集』をめぐって -、ストラスブール大学招待講演、2016

横田冬彦、京都帝国大学附属図書館蔵書の成立、書物・出版と社会変容研究会、2017
有坂道子、漢蘭折衷医・小石家の医書とネットワーク、書物・出版と社会変容研究会、2017
横田冬彦、仏教書の読者、ライデン大学ワークショップ「書物の時代の宗教」、2019

〔図書〕(計4件)

横田冬彦編著、平凡社、『本の文化史 第4巻 出版と流通』、2016、350
有坂道子編、京都橘大学、『小石家書簡にみる江戸期医学と知識人ネットワークの基礎的研究』、
2016、124
小石家文書研究会(有坂道子ほか5名)、『究理堂所蔵 京都小石家来簡集』、思文閣出版、2017、
346
横田冬彦、岩波書店、『日本近世書物文化史の研究』、岩波書店、2018、504

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 有坂道子

ローマ字氏名: Arisaka Michiko

所属研究機関名: 京都橘大学

部局名: 文学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 30303796

(2) 研究協力者

研究協力者氏名:、ローマ字氏名:

水沼尚子、Mizunuma Naoko

山下耕平、Yamashita Kouhei

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。